



間下 直晃
ブイキューブ
取締役社長CEO

経済同友会 つながる▶▶

リレートーク #236

ベンチャー厚遇の 時代を迎えて



廣渡 嘉秀
AGSコンサルティング
取締役社長

日本社会におけるベンチャー企業の位置付けが劇的に様変わりしており、私が携わり始めた1994年と比べると、まさに隔世の感があります。当時、ベンチャーの資金調達といえば3,000万円でも相当なものでしたが、今や30億円でも珍しくありません。この厚遇の時代は一体、何が生み出したのでしょうか？

かつてベンチャー企業といえば、どこかしら「得体の知れない」存在でした。ディスクロージャーも義務付けられていなかったため、自社に有益でない情報を必ずしも開示していませんでしたし、投資家もそれを割り引いて投資するしかない。結果的に調達規模も小さくならざるを得なかったのが実情です。

大きな転機はやはり、1999年に創設された東証マザーズでしょう。ご承知の通り、この流れがベンチャーの情報開示を促進し、資金調達を容易にするだけでなく社会的地位を向上させました。ベンチャーが大企業との関係改善に努めてきた一面もありますが、大企業も彼らを受け入れるようになってきました。こうした双方の融和と、経済に与えるインパクトの高まりこそが、「厚遇の時代」を生んだのだと思います。

もちろんアメリカや中国などに比べると、わが国のベンチャー企業はまだまだ見劣りすると言わざるを得ません。世界にはGoogleやアマゾンといった、トヨタ自動車の時価総額すら超える巨大ベンチャーがごろごろしています。

私は何もいたずらにベンチャーの大量輩出を主張しているわけではありません。そこには不祥事や倒産などを伴うからです。それでもこれからの日本には、ベンチャー精神にスポットを当てイノベティブな企業行動を起こす推進力が不可欠だと思います。

ベンチャー企業が健全かつ加速度的に成長を続けることと、大企業とベンチャーがお互いの良さを活かしていくこと。こうした流れが日本の持続的な経済成長を促し、世界の発展に寄与していくことを願ってやみません。

▶▶ 次回リレートーク

赤池 敦史

シーヴィーシー・アジア・パシフィック・ジャパン
取締役社長 パートナー